

この冊子は、令和二年春の万倉護国神社慰霊
祭さくら祭の授与品として遺族・来賓・参拝
者にお渡ししたものです。どうぞお読みにな
って下さい。

ご英霊の思いに 応えるために

蛍の光

第六版

令和二年さくら祭

靖国神社

皆さんご存知「蛍の光」卒業式の際、全校生徒で歌った歌です。
今でも多くの学校で歌われていると思いますがどうでしょう。一般には二番までしか歌われませんが、ふとしたことから四番まであることを知りました。

蛍の光

蛍の光、窓の雪、

書読む月日、重ねつゝ、

何時しか年も、杉の戸を、

開けてぞ今朝は、別れ行く。

止まるも行くも、限りとて、

互に思ふ、千萬の、

心の端を、一言に、

幸くと許り、歌うなり。

筑紫の極み、陸の奥、

海山遠く、隔つとも、

その眞心は、隔て無く、

壹つに尽くせ、國の為。



千島の奥も、沖繩も、

やしま

八洲の内の、護りなり、

まも

至らむ國に、勲しく、

いさお

努めよ我が背、恙無く。

わがせ

つつがな

ある資料によると、三番と四番が歌われなくなった経緯は、「戦後はこの国家主義的（軍国主義、滅私奉公）とも取れる歌詞が敬遠され、また日本固有の領土である千島や沖繩が他国の占領下に置かれたという事情もあり、教育現場への指導などによって歌われなくなっていくたものと思われる。」と記されている。

この三番と四番が“軍国主義とも取れる歌詞”と解釈されるのであれば、それは自虐史観と戦後の民主主義の象徴であるとも言えます。国を守って何が悪いのか、この自虐史観から多くの、教えられない事実が見えてきます。三十年のさくら祭には、北海道の西側でのソ連の狡猾な酷い侵略「占守島の戦い」を紹介しました。それでは北海道の西側での歴史上の事件を述べてみたいと思います。此等の事件はGHQによる「WCID」によって、連合国側の残虐行為は、伏せられ、多くの国民は知らされず現在に來ているからです。しかし、殊に北海道民にとっては忘れることの出来ない悲しい事件です。

それは、三船殉難事件です。

一般的には昭和二十年（一九四五年）八月十五日が終戦の日として認識されているのですが、実際にはその日以降も北海道近辺の樺太や千島列島では不法侵犯者であるソ連軍との戦闘が続きました。

その結果、歴史上一度もソ連（ロシア）の領土になった事がない北方四島を含む全千島列島や南樺太がソ連の武力により占領され、今もって返還されないまま現在に至っているのです。

そして同じく終戦後の八月二十二日には、留萌沖の日本海において樺太からの引揚者で満載の船舶三隻がソ連軍潜水艦からの攻撃を受けて相次いで沈没あるいは大破し、おびただしい数の民間人が犠牲になるという悲劇が起きました。

戦争も末期、広島に原爆を投下され、もはや日本の敗色が濃厚となった昭和二十年八月八日、これまで太平洋・アジア戦線においては中立的立場だと思われたソ連が突如として連合国側に参加のうえ日本に対し宣戦布告、直後には満州国や当時日本領であった千島列島（以前紹介した占守島の戦い）・南樺太への侵攻を開始しました。

折しも両国間においては昭和十六年四月に調印された「日ソ中立条約」（相互不可侵条約）が発効中であり、それを一方的に破棄し相手国に侵略する事など言語道断たる条約違反ですが、ソ連はそれを完全に無視します。相手が負けるとわかるとそれに乗じて行動するというソ連の狡猾さを肝に命じるべきです。まさに火事場泥棒。

思わぬソ連の参戦に対し、既に青息吐息だった日本軍は抗戦も空しく後退を余儀なくされ、八月九日には米軍により再び原爆が長崎にも落とされた事で、ついには連合国側から突き付けられたポツダム宣言を十四日に受諾し無条件降伏に至りました。

その後、日本軍の降伏により連合国側にも順次交戦中止命令が発せられました。しかし、しかしですソ連だけは攻撃の手を緩める事はありませんでした。

連合国陣営であるはずのソ連に何故そんな勝手な独自行動が許されたのでしょうか、実はこの卑劣極まる軍事作戦の背景にはアメリカとの密約が関係していたのです。

遡ること昭和二十年二月にソ連の指導者・スターリンとアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトの間で交わされた「ヤルタ協定」においては、この戦争の早期終結を図ったルーズベルトがソ連に求めた対日参戦の見返り

⁸⁶ 過去の歴史で最も人を殺した指導者。自国民を自らの手で、有名な大粛清、300万人が粛清されたと言われている。国民は恐怖や猜疑心に脅える悪夢のような日々を送るはめになり、「ロシア人の家族が安心して話せるのは、夜布団の中で丸くなっているときだけ」とさえ言われた。現在いた北朝鮮で行われている政治を見るに、自分の地位を強固にする手法はスターリンの手法そのものです。

として、日露戦争によって失った「南樺太の領土復帰」や「満州・朝鮮における權益復活」、「千島列島の領有權獲得」などソ連側の要求を容認する旨が非公式ながら合意されておりました。

ところが、その直後の四月にはルーズベルトが急死、後任のトルーマン大統領が一転強固な反共産主義方針であったので、密約を反故にされる可能性を恐れたスターリンとしては何としても日本が降伏する前に参戦し、既成事実を作るためにこれらの地域を早急に実効支配する必要がありました。

片や、連合国側を主導するアメリカとしても今やソ連を敵対勢力と見なしていたものの、そもそも自国の前大統領がスターリンに要請したのが事の発端であり、この段階では名目上味方であるソ連を強制的に阻止するまでの理由がないため、ヤルタ協定対象地域内においてはこの暴挙を事実上黙認したのです。

また一説ではこれが、戦後における日本とソ連の接近を防ぐため、「領土問題」という禍根が残るようアメリカ側が謀った一策とまで言われています。

このような大国間の欲得的思惑により、戦争が終わってもなお侵攻を続けるソ連軍に際して各日本人居留地は大混乱を極め、避難民が奇禍に見舞われる事となります。それは日露戦争後のポーツマス条約（明治三十八年調印）によって、賠償金代わりにロシア（当時）から正式に日本へ割譲された「南樺太」でも状況はまったく同じでした。

石炭・石油などその天然資源の豊富さゆえ有望な新天地として期待されていた南樺太は、大企業によって炭鉱・製紙工場などが建設されてから急激に発展が進み、昭和二十年には四十万人以上の民間人が居住していたと言われています。

もちろんソ連側から見て奪回すべき最優先地域のひとつであったこの地でも、八月十一日には北樺太との国境線において本格的な戦闘が始まっていますが、駐屯していた国境警察隊や陸軍守備隊の応戦により、かろうじて敵の進撃を水際で食い止めていました。

しかし多勢に無勢、防衛線を破られるのも時間の問題だと思われ、沿岸地域からの敵上陸も予想される事から

居留民の即時避難が急務と悟った樺太庁長官の命により民間・軍用を問わず脱出用の船舶が対岸の北海道稚内などからも緊急召集されます。

おどまり

かくして出発口である大泊港には避難を求めて樺太各地から殺到した数万の人々がごった返していましたが、この緊急時、避難用に準備出来た船舶数が大小合わせて十隻余りしかなく、ひとまず女性・子供・老人を優先して乗船させる事になりました。

距離にして百六十百弱、地図上では近くに見える稚内港ですが、実際の航行には片道八〜九時間かかっており、船上の人々にとってはその時間は更に長く感じた事でしょう。

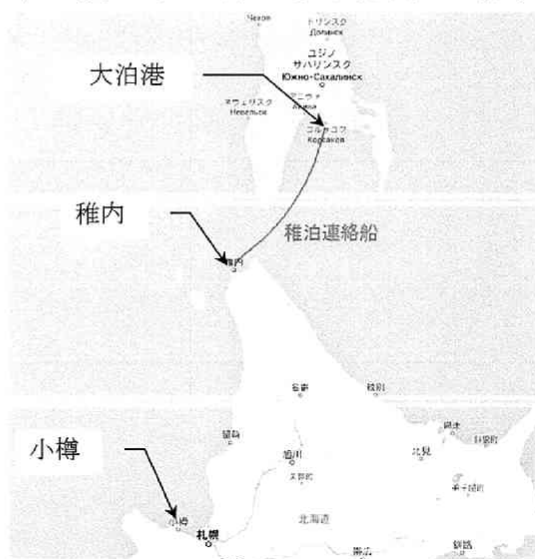
所要時間的に各船一日一往復しか出来なかったため決して捗々しいとは言えなかったものの、地道なピストン輸送により、それでも最終的には避難が始まった八月十三日から守備隊降伏後の「島外移動禁止令」が出される八月二十三日までの十一日間で島民八万人弱が樺太から命からがら脱出しています。

しかしその頃、避難民が続々と到着する稚内では彼らをそこから陸路移動させる手段に頭を悩ませておりました。

当時稚内には鉄道（宗谷本線）こそ通じていたとは言え、そのかかる時間や便数の少なさから考えても、数万人レベルの人々の速やかなる移動を実施する事など現実的に無理だったのです。

そこで一部の引揚船については受入先を小樽へ変更させる事が考慮されました。

幸いにして、もつとも危険が想定された大泊〜稚内間の航行においては敵からの攻撃を受けておらず、この先は本土近海を南下するのみだったのであるや安全だと思っただけでしょう、多くの人々が小樽行きを希望したと



樺太・北海道地図

聞きます。だが、本当の危険水域は違う場所にあつたのです。その危険水域で起きた事件が今に伝わる三船殉難事件です。

その一つ々を見てもみましょう。

【小笠原丸殉難】

通信省所有の「小笠原丸」（二四〇四トン）は国産初の電纜敷設船として、戦争末期は稚内・樺太間などの海底ケーブル敷設作業に従事、稚内港で終戦の日を迎えましたが、直後、豊原通信局長からの要請を受け樺太在住の通信省関係者及び家族の避難を支援すべく八月十七日には稚内を出港、対象引揚者約千五百名の本土輸送後、引き続き一般引揚者の輸送のため小笠原丸は折り返し再び大泊港へ向かう事になりました。

そして到着した八月二十日には女性・子供を中心とした千五百名ほどの避難民を乗せ大泊を出港、翌日稚内で約九百名を下船させた後、前述した理由から小樽を目指します。

危険水域を無事に抜けた事で緊張感から解放された乗員や引揚者には、いよいよ小樽が近づくにつれ、おそろしく安堵の表情が浮かんでいた事でしよう。

ところが、航路の三分の二を過ぎたあたりの増毛沖^{ましけ}合約十^{まい}百（頁十参照）の近海において、その希望が絶望に一変する事件が発生しました。

二十二日午前四時二〇分頃、小笠原丸は突然出現したソ連軍潜水艦の狙い撃ちに遭い、魚雷の被弾によりあつという間に沈没してしまつたのです。

就寝中の時間帯で起こつたこの事件、攻撃を受けてから沈没まで数分の時間しかなかったため、ほとんどの乗船者は脱出する事も出来ずに船と運命を共にしてしまいました。が、かろうじて海上の漂流物につかまっていた数少ない生存者たちも浮上してきた敵艦の機銃掃射を受け次々と散つていったと聞きます。

スターリン、北海道の北半分を要求



何故交戦地域でもない日本海、それも近海に敵がいたのでしょか、ソ連は南樺太や千島列島だけでは飽き足らず、実は留萌と釧路間のラインを境にした北海道北東部へ侵攻・占領する計画を着々と進めていたと思われます。

そして八月二十四日に予定された作戦決行日を前に上陸地点である留萌近辺の沖合には前哨部隊たる潜水艦が偵察目的で展開されていました。

つまり、小笠原丸は知る由のない敵の作戦水域内に入ってしまったため、謂れない攻撃を受けるという悲運に見舞われたのです。

その後、敵の執拗な攻撃から何とか難を逃れたほんの一握りの生存者は救命艇で増毛町別荘の浜に上陸、通報を受けた町役場職員は住民と協力のうえ沖合での救助活動を行いました。が新たな吉報が届く事はありませんでした。

やがて、増毛の海岸には物言わぬ亡骸が次々と漂着し、そのほとんどが女性や幼気な子供たちだった事から、周辺はやりきれない悲しみと怒りに包まれたと言います。

この事件では、船長を含む乗員五十七名・避難民約五百八十名が犠牲となり、生存者はわずか六十二名に過ぎませんでした。

かくして、かつて長崎沖で難破したロシア客船を救助し多くの人命を救った「小笠原丸」は、あるうことかその後継国ソ連の手にかかり日本海の露と消えていったのです。



小笠原丸
海底ケーブル敷設船
三菱重工業長崎造船所建造

【第二新興丸殉難】

「第二新興丸」(二五七七トン)はもともと民間会社所有の貨物船でしたが、戦時に際して海軍に徴用され、単装砲や爆雷などの武装が施された「特設砲艦兼敷設艦」として主に北方における船団護衛や哨戒任務に従事しました。

そして千島得撫島への食糧輸送任務の途中で終戦を迎え、稚内へ帰港後、他の船と同様に樺太引揚の支援に回る事になったのです。

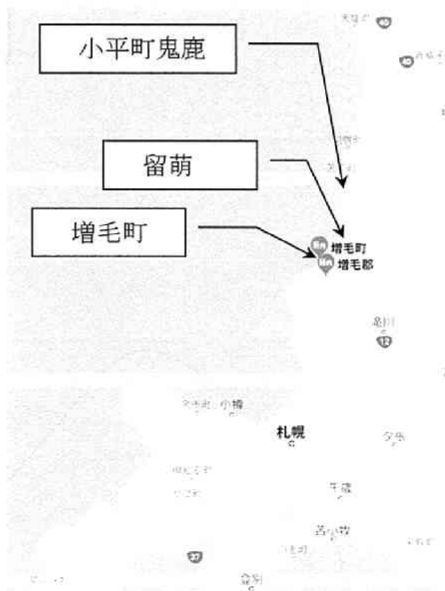
不休のヒストン輸送を繰り返し、本土帰還に際しては既に三度の貢獻を果たしていた新興丸でしたが、八月十九日夜には四回目となる輸送を敢行すべく大泊港に到着、その後船体のトラブルにより一日遅れとなったものの、約三五〇名の引揚者を乗せ八月二十一日に大泊を離れた船は、

混雑を極め受入が困難な稚内を避けて小樽港を目指す事になりました。当時としては新型エンジンを搭載していた船は途中難もなく順調な航行を続け、八月二十二日午前五時頃には「今や」認識なきも最高危険水域」となった留萌沖にさしかかります。

その時、装備されていた電波探信儀（レーダー）には正体不明の船舶が捉えられていましたが、小一時間前に起こった小笠原丸の悲劇など知る由もない新興丸は、それらが今まさにこちらへ向けて雷撃せんとするソ連の潜水艦であるとは思ひもありませんでした。

かくして、発射された魚雷に気付き回避行動を取るも時既に遅く、新興丸は右舷側面の船倉付近に被弾、更に浮上した二隻の敵潜水艦が砲撃・銃撃を加えてきたため、必死の応戦を開始しました。

引揚船からのまさかの反撃にひるんだのか、あるいは新興丸の砲撃によりダメージを受けたのか、ほどなく敵



艦は再び深く潜航したため最悪の事態は免れ、そして深手を負ったものの自力航行が可能だった新興丸は、通報により駆け付けた水上偵察機の護衛を受け、最寄りの留萌港に何とかたどり着く事が出来たのです。

しかし、魚雷の直撃を受けた船倉や、直後の敵の銃撃により甲板上にいた多くの人々が命を落とし、その数は行方不明者と合わせて約四百名とも言われています。

ほとんどの人が助からなかった小笠原丸事件と比較すると被害が少なかったようにも思えますが、逆に親子が死に別れてしまうケースが多く、留萌の小学校の校庭にひとまず安置された母親あるいは子供の亡骸の傍から決して離れようとしていない残された人々の姿はとも見るに忍びない光景だったと言います。

【泰東丸殉難事件】

「泰東丸」(八百八十七トン)は民間会社所有の貨物船ですが、終戦前後には樺太から食糧を積出しの要請を受け小樽を出港、八月十七日には大泊に到着しています。

ところが、入港した泰東丸には思いもよらない任務が待っていました。というのも、その任務とは米など本来の積荷の他に「引揚者を可能な限り乗船させて小樽へ向かう」という彼らにとっては「寝耳に水」の内容だったのですが、逼迫した情勢から予定外の船荷すなわち引揚者を満載した貨物船泰東丸は八月二十一日に大泊を離れたのでした。

おにしかむら

その後、敵襲にも遭う事もなく航海は平穩無事に進みましたが、鬼鹿村(現・小平町鬼鹿)沖を航行中の翌二十一日朝、海上に漂う大量の木片や乗船者の携帯品などを発見した甲板上是騒然となります。これらは他船(実際は第二新興丸)における明らかに尋常でない事態の発生を示していました。前二船と同様ここに至り「敵の攻撃」を想定していなかった泰東丸は、「浮遊機雷接触事故の遺留品」であろうと判断、航路を幾分本土寄りに変更した上で慎重に先へ進む事にしました。

しかしその時、船は「魔の海域」の真つただ中にあったのです。そして午前九時五〇分頃、突然右舷前方に潜水艦が浮上、泰東丸に向かって砲撃を始めました。

対して、これをアメリカ軍の臨検に際する威嚇射撃だと思いい直ちに停船した泰東丸は、戦時国際法に則り「白旗」を掲げ、「抵抗の意志がない」旨を相手に伝えます。

ところが、その潜水艦はそれを見、無抵抗の船に狙いをすまして更に激しい砲撃を加えてきました。それは米軍ではなく、先行の二隻の引揚船に対しても残忍な攻撃を行い壊滅的損害を与えたソ連軍の潜水艦だったのです。

容赦ない砲撃や機銃掃射により、

甲板上の人々は次々と斃れ、船体に大きなダメージを受けた泰東丸はやがて二つに折れるようにして、六百六十七名の生命と共に沈んでいきました。

この事件の生存者は百十三名、海上を漂流している所を、稚内から大湊へ向かうため付近を航行中であつた海軍海防艦に発見・救助されています。他船と同じく、泰東丸の乗船者も女性・子供が中心であり、銃撃から難を逃れたものの漂流途中で力尽きた者も少なくなかったそうです。

この事件については現ロシア政府もその関与を認めていないため、公式には未だに「国籍不明」の艦による所業とされますが、旧ソビエト崩壊後に公開された公文書記載内容によつてソ連太平洋艦隊第一潜水艦艦隊所属の「L-19」と「L-19」の二隻がその実行犯である事が現在明らかになっています。

事件海域においては、八月二十二日午後零時、つまり三船最後の泰東丸事件の約二時間後に発令された北海道



三船遭難慰霊之碑

碑文

昭和二十年八月十五日 太平洋戦争終る

終戦後七日 昭和二十年八月二十三日早曉

の海は波穏やかにして 微風甲板を渡る

この日泰東丸 第二新興丸 小笠原丸の三船

は戦乱の樺太(サハリン)より緊急引揚の老幼

婦女子乗組員 五千八十二名を乗せ鬼鹿沖

にかかりしが突如旧ソ連の潜水艦による雷砲

撃に遭い瞬時にして沈没或は大破し 千七百

八名の尊き生命を奪わる

留別の地樺太を脱し数刻夢に描きし故山を

目撃にしてこの惨禍に遭う悲惨の極みなり

星霜ここに三十年我等同胞慟哭の海に向かい

霊鎮まらんことを祈りつつこの碑を建つ

昭和五十年八月二十三日

樺太引揚三船遭難慰霊碑建立合同委員会

小平町鬼鹿の「にしん文化歴史公園」に建つ碑

占領作戦の中止命令に伴い、近辺でのソ連軍の軍事行動が凍結されたと言われています。

実はこの作戦中止の背景にもソ連とアメリカの激しい駆け引きがあり、簡単に言えば「ソ連が北海道北東部の占領を断念する見返りに千島全島の領有を黙認するが、さもなければ中千島の得撫島に米軍基地を置く」とのトルーマン大統領の通告を最後はスターリンがやむなく呑んだ形となりました。

ソ連としては北海道占領の既成事実を盾にして、領有権に関する戦後処理方法についてアメリカ側から最大限の譲歩を引き出す事が当初の目的だったと思われますが、初動（参戦）の遅れにより北海道上陸が果たせず、結局ヤルタ協定合意内容以上の成果を残せなかった事をスターリンは相当に悔やんでいたと言われています。

事件発生時は中止命令発令前につき当初作戦の遂行中だと思われておりますが、これから敵国本土侵攻の奇襲をかけようとする国が、その決行前においてわざわざ上陸地点付近の偵察部隊に航行中の船舶を片っ端から攻撃させるなどという作戦を立てるとは到底考えられないのです。

そもそも「白旗」を掲げた民間船に攻撃を加えるなど論外の上、漂流者に対する執拗な追い打ちや、小型船に対しては魚雷を使用せず砲撃・銃撃によって時間をかけて葬り去るなど、それはもはや本来の作戦に基づく軍事行動ではなく、撤収する事を知っている者がその前にまるで置土産のごとく、面白半分に無抵抗の人々をいたぶっているような印象しか感じられません。

もし憶測通り、鬱憤晴らし的に事が実行され、落とさずに済んだ生命が奪われたとしたらこれほど許せない話はないでしょう。

しかし現実にはソ連占領後の各地においては、実質アメリカが立案・制定した「ポツダム宣言」第九条（日本人の即時帰還の保証）をまるで無視した日本兵ら捕虜に対するシベリア連行・強制労働従事や居留民への鬼畜な所業など数々の蛮行がソ連軍によって平然と行われており、これらの条項違反行為には「その主導や決定には一切従わない」とのソ連のアメリカへ対する「当てつけ」あるいは挑発という側面があった事は否めません。かくてその矛盾がすべて日本人へと向けられたのです。

それにしても、たとえ戦時の命令であれ目の前の無抵抗の女性・子供に対して躊躇なく手をかけるまでに人間はかくも残酷になれるものなのでしょうか。ただそれも現代から見た日本人としての感覚の話であり、大陸系の多くの国々はいにしえから隣国間における血塗られた歴史を経て今に至っています。

地続きであるだけに「相手を滅ぼさないといずれ自分たちが滅ぼされる」とばかりに一族郎党や民族そのものが情け容赦なく根絶やしにされ、その目的の達成のために狡猾かつ残酷なあらゆる手段が長い間、当たり前のようにそして徹底的に行使されてきました。

ましてや、旧体制のロマノフ朝を血に染め、革命で倒した後、「反革命勢力」との熾烈な内戦、そして一九三〇年代における共産党内の対抗勢力七〇万人（党内のみ）の大粛清などと、誕生から三十年も経たない国内の歴史だけを見ても絶えず自国民を殺戮してきたソビエト連邦にとっては、日露戦争やシベリア出兵の仇である日本人の生命など、ほんの少しも気にかける訳がありません。

そのような国が、「国際条約を破り」、突然他国に侵略し、「弱者を平気で虐殺し」、そして”その事実を認めない”のも当然の事だと残念ながら認識するべきなのです。

それから時代は移り、現在ロシアとの関係改善が取り沙汰されていますが、最近のウクライナ情勢を見ても根本部分は何ら変わっていない印象を受けます。

日本人の思う友好と彼らの考える友好とは同じ言葉であっても内容は全く違うということを国民ひとりひとりが肝に銘じるべきです。新しき令和になり、世界は混沌としております。すでに戦後体制は崩れており、日本は自国の安全保障のため何をすべきか本当に考えるときに来ております。それが、この事件で無念にも日本海に散っていった千七百余名の御霊にせめてもの報いる途ではないでしょうか。

下記 小笠原丸遭難者殉難の碑について

増毛町は毎年八月二十二日に町長、助役、教育長、消防団長まで、出席して町主催で慰霊祭が行われます。町がこうした行事を行うことになった背景に一人の元町会議員さんの遺徳がありました。増毛の沖で沈んだ小笠原丸に残る遺体、遺品を私財を投げうって、引き上げた村上高徳さんです。

昭和二十年八月十五日、村上高徳さんは稚内で終戦を迎えた。補充兵を教育していた軍人だった高徳さんは、増毛に戻って雑貨商を営んだ。ところが見慣れない人が、線香やろうそくを買いにくるのを見てどこからきたのかと尋ねると、小笠原丸の遺族だった。

黙って見てはいられないと町会議員に出馬。当選はしたものの、町で何とか遺体の収容をと議会に求めたが町のふところもそれまでの余裕がなかったためそれは実現しなかった。そこで、自分がお金をだして引き上げ船3隻、潜水夫5人を頼み、収容作業をはじめることにした。

収容作業は昭和二十六、二十七年の二年間。当時のお粗末な潜水服で、北の海、水深七十メートルでの作業は困難をきわめた。収容された遺体を犠牲者の数六百二十九体に分骨、遺族にお返した。「二年間にわたっての収容作業だったので徐々に家計を圧迫し、生活も苦しくなっていく。潜水夫の最後の給料は逓信省から無償で小笠原丸を譲り受け、引き上げたスクリーをクズ鉄として売って支払ったとのこと。町からの資金援助はなかったものの、ニシン漁の親方からのロープの援助、遺骨の搬送も消防団が協力してくれた。こうした運動や歴史があつて、慰霊祭を町が責任を持つて今も行っているのです。

「小笠原丸殉難碑」の隣には昭和五十七年に亡くなった村上高徳さんのお墓があります。

平成二九年、札幌に所要でかけた際、この殉難の碑を訪れました。



小笠原丸遭難者殉難の碑

増毛町の町営墓地

身元不明の20柱の遺骨は此処に眠っています

参考文献
小林 喜平氏の慰霊碑を訪ねて等

万倉護国神社社務所
令和二年四月